

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：33916
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2019
 課題番号：16K09169
 研究課題名(和文) 効果的な医療従事者向けチームコーチングプログラムの開発

 研究課題名(英文) Development of Effective Medical Team Coaching Program

 研究代表者
 田口 智博 (Taguchi, Tomohiro)

 藤田医科大学・医学部・講師

 研究者番号：30534820
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：開発したプログラムの特徴は、どのような集団にも実施可能、3～6か月間・3～4日間の集合セッション、現場の課題を扱う実務、であった。

10の医療チーム(参加者80名と実施者21名)を対象にプログラムを実施した。メンバーの主体性、メンバーの関係性とチーム意識、チームの目標と戦略、チームの成果のすべての尺度でプログラム実施直後と3か月後で直前に比べて有意に向上し、個人とチームの変化の中心カテゴリーであった。参加者は、心理的負担はあるが、満足度や業務への実用性は高いと認識した。チームが成果を上げ自走するには、プログラムの日数、チームの権限、チームの内の温度差、現場からの抵抗などが関連すると感じていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1. 今後、あらゆる医療チームに対してチーム・トレーニングを実施することが可能となり、メンバーの主体性、メンバーの関係性とチーム意識、チームの目標と戦略、チームの成果が向上することに大きな社会的意義がある。また、プログラムは現場の課題を扱う実務であることから組織や地域へ貢献でき、医療の質の向上に寄与できる。

2. 効果を上げるチーム・トレーニングの要素が明らかになることで、多職種連携トレーニングといったチーム・トレーニング全体の更なる発展に寄与できるところに学術的意義がある。その結果、卒前・卒後医学教育においてチーム・トレーニングが多くの大学や医療組織で導入・展開されていくことが可能となる。

研究成果の概要(英文)：The characteristic of the developed program was that the theme was practical work dealing with on-site issues, which consisted of a group session for 3 to 6 months and 3 to 4 days that could be conducted for all groups.

The program was implemented for 10 medical teams (80 participants and 21 practitioners). Member's independence, member's relationship and team consciousness, team's goals and strategies, team's achievements were significantly improved immediately after the program and 3 months after the program compared to immediately before the program. The four items were the central categories of individual and team change. Participants recognized that there was a psychological burden, but the satisfaction was high and the practicability for work was high. They felt that team's achievements and self-running were related to program days, team authority, differences in motivation among team members, resistance from the workplace, and so on.

研究分野：総合診療、家庭医療、コーチング、医学教育

キーワード：チーム医療 チームトレーニング チームコーチング プログラム開発 アクションリサーチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) チーム医療推進のためチーム・トレーニングが重要であるが、十分なエビデンスがない
チーム医療の推進に極めて重要なチームを対象にした“チーム・トレーニング”¹は、これまで、急性期、回復期、精神科領域、周産期領域といった特定の領域においてそれぞれ異なり、汎用性のあるチーム・トレーニングの方法やその効果を検証した研究はほとんどない^{2,3}。

(2) 「チーム・トレーニング方法としてのチームコーチングとその課題

今回、チーム・トレーニングとして、「グループからチームに変容するプロセスを支援し、ビジョン実現・リーダーシップ開発・当該組織を超えた地域、社会への貢献を創り出すように相互の関わりを促進する」“チームコーチング”⁴を医療チームに応用した。汎用性のあるチームコーチングはこれまでビジネスにおける主な成果として、業績志向による目覚ましい成果実現、リーダーシップを発揮するチームプレイヤーの育成、自発性を重視する組織文化の創造、が挙げられている⁴。医療チームに応用する場合の課題として、ビジネスとは異なる医療チームとテーマに対してどのように介入すると効果的なのか、どのような成果がどのくらいあるのか、これまでの医療チームを対象としたチーム・トレーニングとどのように成果が異なるのか、が挙げられる。

(3) 医療従事者向けチームコーチングプログラムの開発とパイロットスタディー

これまでに、暫定版医療従事者向けチームコーチングプログラムを開発(図1,2)し、2つの医療チームを対象にパイロットスタディーを実施した⁵。プログラムを実施した結果は、メンバーの主体性、関係性、チームの目標と戦略の尺度で有意に向上した。変化のプロセスの中心カテゴリーは、自己存在の意義の確立、主体性と関係性の向上、チーム意識であった。参加者は、プログラムに対する負担感はあるが、チームの方向性が明確になる、など有益だと認識した。プログラムの改善点として、組織から権限が与えられたグループを対象とすること、などが挙げられた。これらは、2つの医療チーム(17人)を対象に実施した結果であり、プログラムを実施する医療チーム数を増やす必要がある。本研究の目的は、開発した医療従事者向けチームコーチングプログラムの効果をさらに検証し、発展すること、である。

図1 プログラムの特徴

2. 研究の目的

開発した医療従事者向けチームコーチングプログラムの効果をさらに検証し、発展すること、である。プログラムの発展はアクションリサーチを用いた。さらに、6つの医療チーム(約48名)に対してプログラムを実施し、

すでに開発した医療チームの評価尺度による実施前後比較でチームのどの領域が短期的及び中期的にどの程度変化したのか、

アンケートとインタビューと観察調査をもとにした質的分析でチームがどのようになぜ変化したのか、

アンケートとインタビューでプログラムをどのように認識したか、を明らかにする。

3. 研究の方法

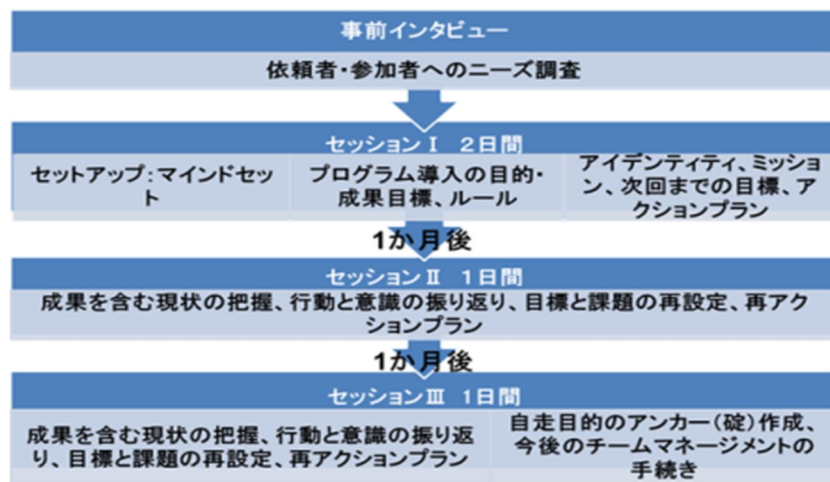
プログラムの発展は開発・実施・評価・改訂のステップからなるアクションリサーチ⁶を用いた。

(1) プログラムの開発: チーム・トレーニング専門家4人へのフォーカスグループインタビューと文献的調査を通して、暫定版プログラムを開発した(既述; 図1)⁵。

(2) プログラムの実施: 開発したプログラムをチームコーチ2名(以下、実施者、合計21名)が市中病院、診療所の複数の医療施設のうち、10の医療チーム(1チーム約8名。以下、参加者、合計80名)を対象にプログラムを実施した。

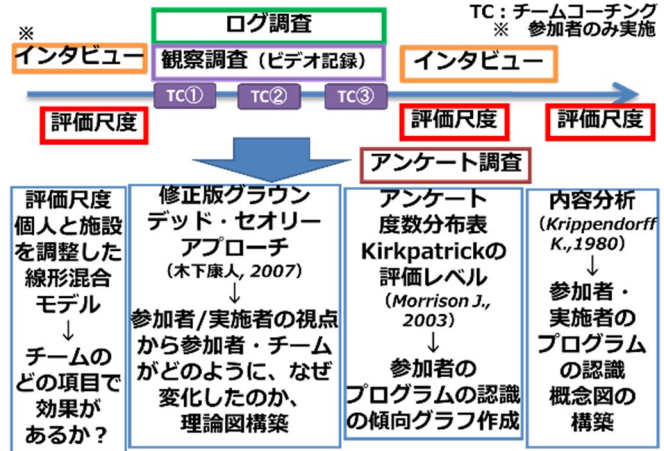
- ・実施者
 - ・チームコーチ2名+スーパーバイザー
- ・対象者
 - ・医療従事者6~8名(実施可能は2~15名)
 - ・グループを対象、いかなるグループにも実施可能
- ・スケジュール・内容
 - ・3か月間、4日間の集合セッション
 - ・現場の課題を扱う実務
- ・手法
 - ・ファシリテーション、チームビルディング、1対1のコーチング、アライメントモデル、事実・探求・突破モデル

図2 プログラムの流れ



(3) プログラムの評価： 量的/質的研究手法を混合した mixed method research⁷ を用いた (図 3)

図 3 プログラムの評価方法



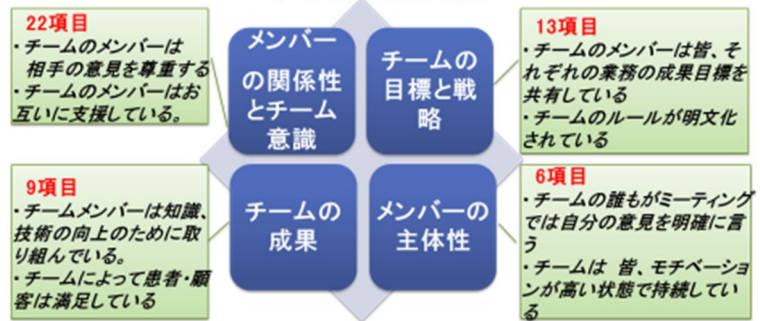
すでに開発した医療チームの評価尺度 (後述) による a. プログラム直前、b. プログラム直後、c. プログラム実施 3~4 か月後、の 1 群事前事後推移パターン比較試験 (個人と施設を混合した線形混合モデルを用いた分析) を行い、チームのどの領域が短期的及び中期的にどの程度変化したのか、を明らかにした。

医療チームの評価尺度は、Guidelines in scale development¹¹ に基づいて包括的で汎用性の高い尺度である⁵。チーム・トレーニング専門家 9 名を対象に Nominal group technique、

The RAND/UCLA Appropriateness Method を用いた暫定版の作成、11 の医療施設 3803 名の医療従事者全員を対象としたアンケートの実施と因子分析、信頼性 (内的整合性)・妥当性 (基準関連妥当性) を検証した 50 項目 4 因子 (メンバーの主体性、メンバーの関係性とチーム意識、チームの目標と戦略、チームの成果) からなる (図 4)。 図 4 医療チームの評価尺度

医療チームの評価尺度 50項目4因子

5件法 1. 全くそう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 非常にそう思う () は評価尺度の項目例



a. プログラム中の観察調査 (ビデオ記録) b. 参加者を対象としたプログラムセッション時およびセッション間のログ調査 (参加者及びチームの変化といった質問項目) c. 実施者を対象としたプログラムセッション時のログ調査 (参加者及びチームの反応といった質問項目) d. プログラム実施後に参加者および実施者を対象に半構造化インタビューを実施、修正版グラウンデッドセオリー

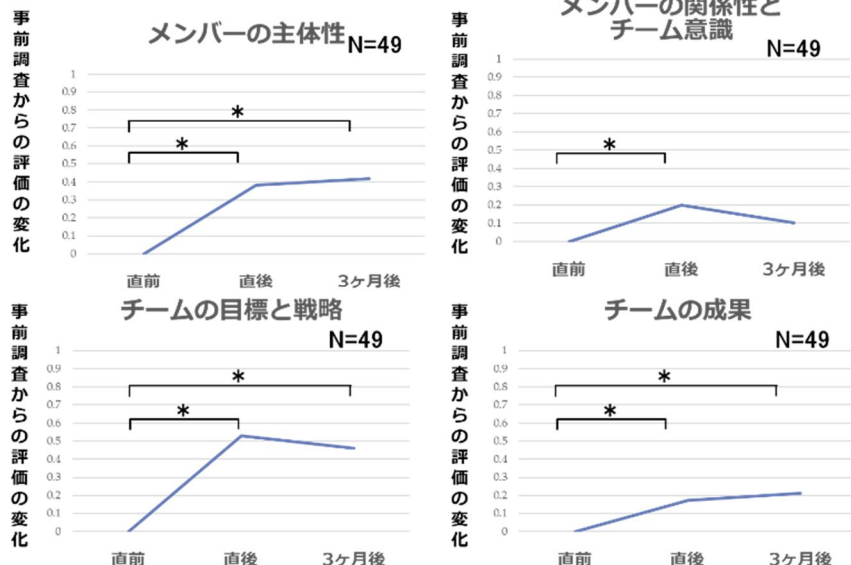
リアプローチ⁸を用いて、インタビューを文字起こし、概念・カテゴリーを作成、理論図の構築、をもとにした質的分析で個人及びチームがどのようになぜ変化したのか、を明らかにした。

プログラム実施後、a. 参加者を対象に自記式質問紙調査および半構造化インタビュー、b. 実施者を対象に半構造化インタビューを実施し、得られたデータから内容分析⁹を用いて、実施スケジュール・実施環境・実施者・実施対象者・心理的反応をカテゴリーとしたコードの図を構築し、参加者・実施者がプログラムをどのように認識したか、を明らかにした。また、実施者よりプログラム改訂について指導助言を得た。 図 4 評価尺度による効果の検証

(4) プログラムの改訂：上記のデータの分析とチームコーチングの調査研究 (文献調査及び研究会) によって 3 名の研究者でプログラムの発展を行った。

4. 研究成果

(1) メンバーの主体性、メンバーの関係性とチーム意識、チームの目標と戦略、チームの成果 4 因子すべての尺度で、チームコーチングプログラム中に有意に向



上した。3ヶ月後は直前と比較して「メンバーの関係性とチーム意識」以外の3因子で有意に向上した(図4)。

(2) 参加者とチームの変化の理論図のストーリーラインは下記の通りであった。

事前インタビューでメンバーへのペーシングと承認がされるとメンバーに当事者意識が生まれ、チームコーチとの信頼関係が構築されることで、また、会議で対等な立場といったルールが設定され、問題の本質は自分たちのどこにあるのかという介入がされ、業務フローが明確にされることで本音で議論がされ、チームの中で他者の存在を受け入れ、自己の存在が確立されると、主体性と関係性が向上する。チームのミッション・ビジョン・バリューズや目標や優先順位で絞りこんだプランと役割を自らが設定することで、責任感とチーム意識が芽生えたとともに、現場での実践への負担感と不安が生じる。もともとの上司部下といった関係からのメンバー間の意欲の温度差が明確になり、現場からの実施への抵抗がある。

これに対してチームとしての振り返り、承認によって互いの存在意義が再構築され、成果物による達成感とチームの相乗効果の期待感が生まれる。他部署の問題に対する当事者意識が生まれ、Win-Winの関係を目指した方法の提案がされる。また、チームのビジョンや方向性に対して連帯意識の介入やSNSを活用し、個人のコーチングが行われること、チームの存在と活動内容の周知や成果発表会を行うことなどで、チームを取り巻く協力者や組織とつなぎ、現場からの承認の支援を行うことで、チームでの会議やメンバーの相互支援が効果的に働く。そして、チームを取り巻く組織が活性化され、チームの成果が達成され、学びを得て、チームが自走する。

通常業務や日常生活においても主体性が向上するといった波及効果がある。

組織からチームに権限が与えられないと意識と行動が阻害される。メンバーが脱退するとチームの自走が阻害される。

(3) 内容分析を用いた参加者・実施者のプログラムの認識の結果の概要は下記の通りであった(図5)。

チームが成果を上げ、自走するためには、理論図の項目以外に4日間以上の集合セッションを1か月間の実践間隔で実施すること、現場の課題を扱う実務であること、目的に合った適切なメンバーを選択すること、通常業務以外で実践することの負担を軽減する支援、が挙げられた。課題として実施費用負担が挙げられた。

(4) 上記の結果からチームが成果を上げ、自走するプログラムは、目的に合った適切なメンバーを選択し、チームに権限を与えること、事前インタビューでメンバーへのペーシングと承認が十分にされること、現場の課題を扱う実務で、4日間以上の集合セッションを1か月間の実践間隔で実施すること、会議で対等な立場といったルール設定、問題の本質は自分たちのどこにあるのかという介入、業務フローの明確化をすること、チームのミッション・ビジョン・バリューズや目標や優先順位で絞りこんだプランと役割を自らが設定すること、現場での実践への負担感と不安、メンバー間の温度差、現場からの抵抗といった個人内・チーム内外の葛藤に対してチームとして振り返り、承認によって互いの存在意義を再構築し、達成感が生まれるように介入すること、セッション間でSNSの活用や個人を対象としたコーチングも行うことで、メンバーの相互支援が効果的に働くこと、チームの存在の周知や成果発表会を行うことなどで、チームを取り巻く協力者や組織とつなぎ、現場からの承認の支援をすること、通常業務に加えて実践することにに対して組織全体からサポートすること、メンバー構成の変化への支援が必要である。

(5) 研究成果を2016~2019年度合計で学会等38つ、web2つ、執筆2本、発表した。

(6) 今後、あらゆる医療チームに対してチーム・トレーニングを実施することが可能となり、メンバーの主体性、メンバーの関係性とチーム意識、チームの目標と戦略、チームの成果が向上することに大きな社会的意義がある。また、プログラムは現場の課題を扱う実務であることから組織や地域へ貢献でき、医療の質の向上に寄与できる。

また、効果を上げるチーム・トレーニングの要素が明らかになることで、多職種連携トレーニングといったチーム・トレーニング全体の更なる発展に寄与できるところに学術的意義がある。その結果、卒前・卒後医学教育においてチーム・トレーニングが多くの大学や医療組織で導入・展開されていくことが可能となる。

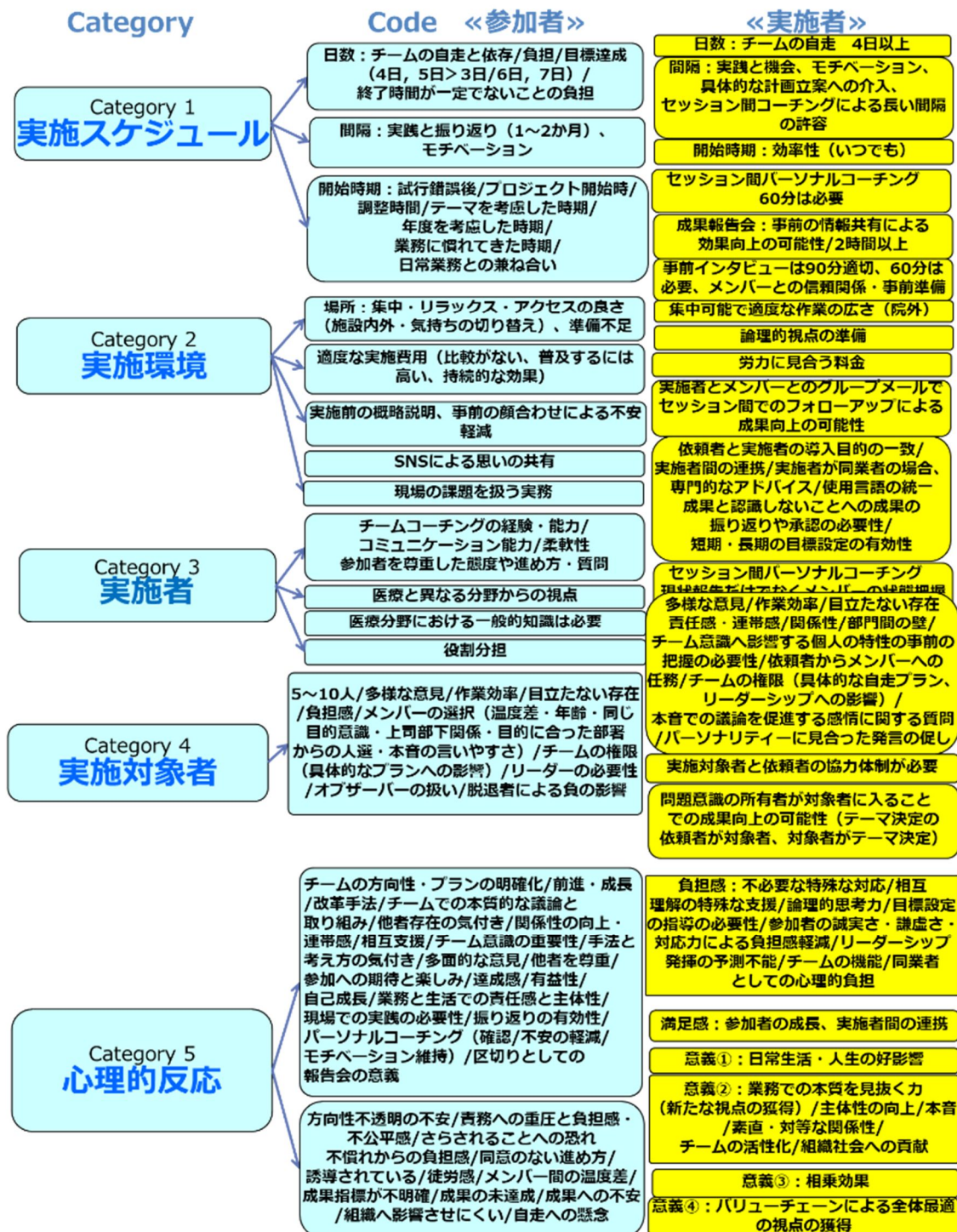
<引用文献>

- 1) チーム医療推進方策検討ワーキンググループ(チーム医療推進会議): チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集. 平成23年6月
- 2) 菊地和則: 多職種チームのコンピテンシー - インディビジュアル・コンピテンシーとチーム・コンピテンシーに関する基本的概念整理 - 社会福祉学 44(3), 23-31, 2004
- 3) Martina Buljac-Samardzic, et.al.: Interventions to improve team effectiveness: A systematic review. Health Policy, 94, 183-195, 2010
- 4) 染屋光宏: 組織・人材開発の手法「チームコーチング」とは: コーチングは、「個人」から

「チーム」の時代へ！企業と人材, 45(991), 48-52, 2012

- 5) 田口智博ら：メディカルチームコーチングプログラムの開発とその効果の検証～パイロットスタディー 第47回日本医学教育学会大会, 2015.
- 6) Ortrun Zuber-Skerritt: New Directions in Action Research. Falmer Press London. 1996
- 7) John W. Creswell, Vicki L. Plano Clark: 人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン. 北大路書房. 2010
- 8) 木下康人：ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 - 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂. 2007
- 9) Krippendorff K. : Content Analysis: An Introduction to its Methodology. Sage Publications, 1980
- 10) Taguchi et.al. : Impact of a mentoring program using coaching skills on junior level medical residents. 15th ottawa conference, 2012
- 11) DeVellis, R. F. : Scale development: Theory and applications (3rd edition). Sage Publications. 2011

図5 参加者・実施者のプログラムの認識



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計37件（うち招待講演 23件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 チーム医療を推進するメディカルチームコーチング～卓越した成果創りにチャレンジする～
3. 学会等名 三重病院看護師研修（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、井上和興
2. 発表標題 メディカルチームコーチング～メンバー全員が成果にコミットする～
3. 学会等名 日本プライマリケア連合学会 第16回秋季生涯教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川村裕（研究協力者）、田口智博（研究代表者）、富山恒（研究協力者）、市川周平（連携研究者）、竹村 洋典（連携研究者）
2. 発表標題 医療従事者向けチームコーチングプログラムの質的および量的研究を用いた評価
3. 学会等名 第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富山恒（研究協力者）、田口智博（研究代表者）、川村裕（研究協力者）、市川周平（連携研究者）、竹村 洋典（連携研究者）
2. 発表標題 なぜ、そしてどのようにチームコーチングプログラムは医療チームの成果を向上させるのか
3. 学会等名 第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングによって参加者・チームはどのようになぜ変化したのか？
3. 学会等名 第21回日本医療マネジメント学会学術総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、富山恒（研究協力者）、川村裕（研究協力者）、市川周平（連携研究者）、竹村 洋典（連携研究者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングプログラムの開発とその効果の検証～最終報告
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 チーム医療を推進するメディカルチームコーチング～卓越した成果創りにチャレンジする～
3. 学会等名 鈴鹿回生病院看護師研修（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 チーム医療を推進するメディカルチームコーチング～卓越した成果創りにチャレンジする～
3. 学会等名 国立がん研究センター東病院看護師研修（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、渡部潔
2. 発表標題 チームコーチングはチーム医療にどのような変化をもたらすか？～取り組み状況と研究成果～
3. 学会等名 チームコーチングカンファレンス2018（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、中川雅章、土屋耕治
2. 発表標題 シンポジウム「組織開発とチームコーチングの今後」
3. 学会等名 チームコーチングカンファレンス2018（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、加藤沙彩（研究協力者）、佐藤友紀（研究協力者）、中野恵里（研究協力者）、森純直（研究協力者）、彼末吉世子（研究協力者）、藤井健人（研究協力者）、大原昂洋（研究協力者）、西村花奈（研究協力者）、市川周平（連携研究者）、竹村洋典（連携研究者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングプログラムの開発とその効果の検証～第4報
3. 学会等名 第49回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、中川雅章、石井幹子、三野直子
2. 発表標題 チーム医療を推進するメディカルチームコーチングセミナー～卓越した成果創りにチャレンジする～
3. 学会等名 第12回日本臨床コーチング研究会総会・学術集会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、中川雅章、小川安夫
2. 発表標題 自走するチームを創るチームコーチング～「個人」から「チーム」を対象としたコーチングの時代へ～
3. 学会等名 第67回医学教育セミナーとワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、井上和興
2. 発表標題 チームコーチングセミナー
3. 学会等名 第1回とっとり総合診療まつり（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、井上和興、中村琢弥
2. 発表標題 メディカルチームコーチング～メンバー全員が結果にコミットする～
3. 学会等名 第13回若手医師のための家庭医療学冬期セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングプログラムの開発とその効果の検証～プログラムの認識
3. 学会等名 第20回日本医療マネジメント学会学術総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾崎仁（研究協力者）、田口智博（研究代表者）、鈴木佳孝（研究協力者）、市川周平（研究協力者）、竹村洋典（研究協力者）
2. 発表標題 医療者向け汎用チームコーチングプログラムの質的・量的混合手法による検証
3. 学会等名 第50回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木佳孝（研究協力者）、田口智博（研究代表者）、尾崎仁（研究協力者）、市川周平（研究協力者）、竹村洋典（研究協力者）
2. 発表標題 質的研究を用いた医療従事者向けチームコーチングプログラムの発展
3. 学会等名 第50回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、鈴木真
2. 発表標題 チーム医療を推進するチームコーチングとチームステップス～個人からチームを対象としたトレーニングへ～
3. 学会等名 第9回日本プライマリケア連合学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングプログラムの開発とその効果の検証～第2報
3. 学会等名 第18回日本医療マネジメント学会学術総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチング～事例報告と今後の展開～
3. 学会等名 日本臨床コーチング研究会 アドバンスミーティング（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 チーム医療を推進するチームコーチングの実践例
3. 学会等名 第10回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングセミナー～卓越した成果創りにチャレンジする～
3. 学会等名 第10回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤井健人（研究協力者）、田口智博（研究代表者）、彼末吉世子（研究協力者）、加藤沙彩、佐藤友紀、中野恵里、森純直、市川周平（連携研究者）、後藤道子（連携研究者）、家研也、北村大、竹村洋典（連携研究者）
2. 発表標題 医療チーム評価尺度を用いた医療従事者向けチームコーチングプログラムの発展
3. 学会等名 第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 彼末吉世子（研究協力者）、田口智博（研究代表者）、藤井健人（研究協力者）、加藤沙彩、佐藤友紀、中野恵里、森純直、市川周平（連携研究者）、後藤道子（連携研究者）、家研也、北村大、竹村洋典（連携研究者）
2. 発表標題 質的研究を用いた医療従事者向けチームコーチングプログラムの発展
3. 学会等名 第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 医療組織のリーダーに必要なコーチング
3. 学会等名 明日の医療の質向上をリードする医師養成プログラム（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 コーチングを活用した行動変容～聴き方/聞き方次第で生活習慣病の患者さんの行動が変わる～
3. 学会等名 COMER NET AOMORI（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、石井幹子、半谷知也、三野直子
2. 発表標題 メディカルチームコーチングセミナー～卓越した成果創りにチャレンジする～
3. 学会等名 静岡家庭医養成プログラムスペシャルグランドラウンド（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メンタリングとコーチング、チームコーチング
3. 学会等名 三重大学大学院 総合診療のためのPhDコース，アカデミックGP教育コース 医学教育学（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 実践！ コーチングセミナー～聴き方/訊き方次第で診療・教育・組織が変わる～
3. 学会等名 第37回NMC研修医のためのブラッシュアップセミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者），半谷知也
2. 発表標題 チーム医療を推進するメディカルチームコーチング-卓越した成果創りにチャレンジする-
3. 学会等名 第2回尾頭橋虹の会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大原昂洋（研究協力者），田口智博（研究代表者），藤井健人（研究協力者），彼末吉世子（研究協力者），市川周平（連携研究者），後藤道子（連携研究者），家研也，北村大，竹村洋典（連携研究者）
2. 発表標題 質的研究を用いた医療従事者向けチームコーチングプログラムの発展
3. 学会等名 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 メディカルチームコーチングプログラムの開発とその効果の検証～第3報
3. 学会等名 第19回日本医療マネジメント学会学術総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）、下津浦剛、中川雅章、福井康雄
2. 発表標題 チームングリーダートレーニングとチームコーチング
3. 学会等名 第14回日本臨床コーチング研究会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 ACPを推進するために多職種でどのように協働するか？ Advance Care Planning～チームコーチング編～
3. 学会等名 第8回在宅医療推進のための多職種合同研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 チームコーチング～初期研修医教育をテーマに～
3. 学会等名 藤田医科大学総合診療専門研修プログラムレジデントディ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智博（研究代表者）
2. 発表標題 2020年度アセンブリ チームコーチング、
3. 学会等名 藤田医科大学アセンブリ 全体練習（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田口智博	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日総研出版	5. 総ページ数 128
3. 書名 日総研グループ情報誌 隔月刊 看護部長通信 Vol.15 No.5（12-1月号）	

1. 著者名 田口智博（研究代表者）、児玉和彦、名倉功二、飛松正樹、中村琢弥、小坂文昭、井上和興、山藤栄一郎、北村大、大川薫、齊藤裕之、田原正夫、出江紳一、西垣悦代、田丸司、松本一成、山本康久	4. 発行年 2016年
2. 出版社 南山堂	5. 総ページ数 1524（1448-1457）
3. 書名 14）チームコーチング In 田口智博（編集）：特集 コーチング 治療 2016年98巻9月号	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・田口智博：ペーリンガー社「第3回コーチング：『よりよい医療現場づくりのヒント&#12316;実践！臨床コーチング』～卓越した成果をもたらすチームを作り上げる「チームコーチング」&#8212;&#8212;「私」から「私たち」へと意識を変える～」 2017年12月6日</p> <p>・田口智博：ペーリンガー社「第4回コーチング：『よりよい医療現場づくりのヒント&#12316;実践！臨床コーチング』～成長をしながら成果ももたらすチームとなるために&#8212;&#8212;問題解決に向けて自走するチームを構築する～」 2018年1月15日</p> <p>・藤田医科大学 教育・研究業績 https://www.fujita-hu.ac.jp/achievements/index.php?action=pages_view_main&active_action=cvclient_view_main_init&cvid=taguchitomohiro&display_type=cv&block_id=608#_608</p> <p>・UMIN-CTR 臨床試験登録情報の閲覧 https://upload.umin.ac.jp/cgi-open-bin/ctr/ctr_view.cgi?recptno=R000015829</p> <p>・三重大学総合診療ネットワークホームページ http://www.hosp.mie-u.ac.jp/soshin/gyoseki_category/presentation/</p> <p>・三重大学全学シーズ集ホームページ http://www.crc.mie-u.ac.jp/seeds/contents/detail.php?mid=20121001-140124&t=c&url=%E8%8A%B8%E8%A1%93%EF%BD%A5%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤井 健人 (Fujii Kento)		
研究協力者	彼末 吉世子 (Kanosue Kiyoko)		
研究協力者	大原 昂洋 (Oohara Koyo)		
研究協力者	尾崎 仁 (Ozaki Hitoshi)		
研究協力者	鈴木 佳孝 (Suzuki Yoshitaka)		
研究協力者	加藤 沙彩 (Kato Saya)		
研究協力者	佐藤 友紀 (Sato Yuki)		
研究協力者	中野 恵里 (Nakano Eri)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森 純直 (Mori Sumine)		
研究協力者	西村 花奈 (Nishimura Kana)		
連携研究者	市川 周平 (Ichikawa Shuhei) (40605474)	三重大学・医学（系）研究科（研究院）・助教 (14101)	
連携研究者	後藤 道子 (Goto Michiko) (10608946)	三重大学・医学（系）研究科（研究院）・助教 (14101)	
連携研究者	竹村 洋典 (Takemura Yousuke) (00335142)	三重大学・医学（系）研究科（研究院）・教授 (14101)	